

論壇：活字メディアが伝える中国バレーボール

～'98世界選手権の報道から～

矢島 忠明*、河野貴美子**

A printed Report on Chinese Volleyball

Tadaaki YAJIMA* and Kimiko KONO**

緒 言

中国バレーボールの近年の国際大会における活躍は、同じアジアのチームである日本のバレーボール界にとっても注目すべき存在である。そこでバレーボール学会では1998年3月、中華人民共和国北京市から、元中国ナショナルチーム監督である孫志安氏を第3回研究大会に招聘し、「温故知新」と題する貴重なご講演をいただいた。席上、孫氏は中国の技術指導、戦術指導について詳細に紹介されたが、そこには中国バレーボール独自の具体的、科学的根拠に基づく理論がちりばめられていた。中国は98年の世界選手権¹⁾及びアジア大会²⁾においても日本を凌ぐ好成績を残している。そこで今回は孫氏のご講演に啓発され、特に98年世界選手権期間中の中国活字メディアの報道に注目し、新聞記事が伝える中国バレーボールの現状と未来について分析、考察を試みたい。

今回引用する新聞は『人民日報』と『北京晩報』とする。なお『人民日報』は、中国共産党の機関紙であり、中国では最も権威ある全国版の新聞である。また『北京晩報』は、北京の夕刊紙であるが、豊富な記事で老若男女を問わず幅広く愛読されている新聞である。

予選の苦境から準優勝まで～中国女子チーム～

世界選手権開幕に際し、中国メディアは今大会の特徴について詳しく報じた。『北京晩報』では、史上最多の参加チームによる大会であること、男女同時同一国開催であること、15の都市を転戦することを始め、リベロプレーヤーシステム、カラーボールの採用、ユニフォームの規定、監督がベンチ前を動いて指示できることなど、今大会で採用する新ルールを紹介し、期待のかかる中国女子については、移動

日程、練習時間まで詳細に伝えた(98/11/2, 3)。

4強を目標とした中国女子は11月3日の予選ラウンド初戦、タイをストレートで下した。この日の報道の特徴は、楽勝であったタイ戦の記事はそこそこに、その後のクロアチア戦、韓国戦に向けての内容が大半を占めたことである。当日は韓国がクロアチアをフルセットで下しており、韓国の粘りあるバレー、クロアチアのエース、イエリッチ(デンソー・エアリービーズで活躍)の強打にどう対応するかについて注目、言及していた(98/11/4『人民日報』)。

中国は続くクロアチア戦にフルセットで辛勝した後、韓国戦でやはりフルセットの末敗れてしまう。移動日であった翌日の記事は敗因の分析と今後の活路を語るもので溢れた。まず『人民日報』では、「変化に対応できず敗れる(輸在应变能力)」と題し、速攻が封じられた後、攻撃が単調になったこと、連続得点された時にそれを脱するすべを自らが持てなかったこと、郎平監督によると若い選手が多くその経験不足が露呈してしまったことなどを敗因として挙げた。題にある「应变能力」とは本番の試合で戦う中で、相手の変化に臨機応変に対応できる力ということであるが、中国のバレーボール報道ではキーワードとしてしばしば見られる用語である(98/11/6)。

また『北京晩報』では、「自分自身の問題を正視せよ(需要正视自身问题)」と題して、相手を軽視していたこと、試合の序盤でエンジンのかかりが遅いこと、精神面の弱さからキーポイントとなる場面で力が発揮できないこと(关键时刻发挥失常)、総得点では中国が上回っていたのに勝てないのはチャンスがつかめていないのだということ(关键时刻没有抓住机会)、ラリーポイントでのサーブミスと新人選手のミスなどを敗因として挙げている。文中の「試合のキーポイント(关键时刻)」という言葉もバレー報道に頻出する用語である。中国のバレーボール用語には「一局中の一关键球(セットを決めるキーポイントとなるプレー)」というのがあり、中国ではこのような点に注目してゲームを見ている、ということがわかる(98/11/7)。

さらに李安格氏³⁾によるコラム記事は「中国女子は前途

*早稲田大学

**東京都立晴海総合高等学校

多難（中国女排前景不妙）」と題し韓国戦を分析している。記事によるとスパイク、ブロック、サーブによる得点は相手と差があまりなかったが、ミスによる失点が18点にもなったこと、中国が本来得意とする速攻の決定率が48.7%に留まったのに対し、韓国は逆に55%の速攻決定率をあげたこと、サーブミスは中国の17本に対し、韓国はわずか3本であったこと、そしてそれらのミスが試合の重要な場面や最終セットで出てしまったことなどを敗因として指摘している。こうした具体的な数字を挙げての試合分析も中国の記事の特徴であり、一般の読者もこうした記事を通じ、バレーボールを観戦する目を養い楽しみを増していくものと思われる。続いて記事は、大きな国際試合の経験を積みレベルアップを図るべきこと、そして中国に必要なのは優秀な新人選手の登場と、他国にはない独自の新技術、新戦術の開発である、と締めくくる(98/11/7)。

2次ラウンドに入り、中国は来日前に対抗試合を行ったイタリアと対戦、ストレートで下すが、キューバにはストレートで敗れる。同日韓国がイタリアに敗れたため中国にもベスト4の望みが生じるが、報道は中国とキューバの力の差、レベルの違いを特に取り上げている。11日9日付「人民日報」は、団長張蓉芳⁴⁾の「このレベルの差を縮めるには『創新の道』を行くしかない」とのコメントを載せた。また同日「北京晩報」は「時代の新潮と落伍者（時代新潮与落伍者）」と題して、中国とキューバを比較分析し、中国は今後覚悟をして臨まないと時代に取り残されてしまうと警告している。

2次ラウンド最終戦、中国はブルガリアを下し目標としたベスト4進出を決める。新聞報道の方も俄然活気を帯び、中国の試合展開ぶりを分析、今後の戦況を予想している。特に「北京晩報」では特派員記者の記事と郎平監督のコメントとの2つのコラムが掲載され、ベスト4進出を決めたブルガリア戦を振り返っている。そのうち特派員記者の記事によると、この試合の鍵は「本番でいかに自分たちのプレーを発揮するか（臨場发挥）」であったとし、中国はブロックが効を奏し（网上優勢）、「速さを以て高さを制する（以快制高）」ことに成功したのが勝因である、とされている(98/11/10)。

また、「人民日報」には「郎平バレーを評す（郎平評球）」と題する注目すべき記事がある。ここには自ら現役時代に袁偉民監督⁵⁾のもと5冠を達成した郎平監督の、いわばバレー哲学とでもいうべき姿勢が読みとれる。

(資料1 98/11/10「人民日報」・要約)

中国女子バレーの監督郎平は、ブルガリア戦を終え次のように語った。

昨日韓国がブルガリアに敗れたことで、中国にも（ベスト4進出の）望みが生まれた。従って今日の試合はたいへん重要なものであった。キューバを除く他のチームは力が拮抗しており、予選ラウンドから中国は苦しい戦いを強いられた。中国は辛うじて2次ラウンドに進んだ

中国队主教练郎平今天在特定环境下进行比赛，比赛后说，由于韩国队昨天输给队员是一次极好的锻炼。

给了保加利亚队，使中国队出现在一线生机，因此今天的比赛非常关键。从小组赛开始，中国队就打得很难。除古巴队外，这个赛区各队的水平都很接近，谁也没有把握胜谁。中国队可以说是摇摇晃晃进入半决赛的，但我感觉一个队只有多经历一些挫折，才能有更快的进步。

中国队近十多年从未与保加利亚队交过手，因此双方并不熟悉。郎平说，因为这场比赛很重要，所以赛前我一再要求队员不要有压力，要放下包袱，全力投入比赛，发挥出自己的水平，去制约对手。在这种只许胜不

在展望下一阶段四强决战的前景时，郎平认为，俄罗斯、古巴、巴西三队的网上实力都比中国队强，但并不是说这球就没办法打了，比赛的胜负关键还是靠临场的发挥。再一个是球员的心态，对手很强，肯定会给我们心理上的压力，这就看你临场的承受能力和应变能力，怎样扬长避短，能够给对方一些压力，看对手在这些压力下的承受能力，这些都是相辅相成的。我希望我们的队员不要把结果看得过重，还是要多想办法去限制对手，给对手施加一定的压力，从而抓住机会，打出风格打出水平。（本报福冈11月9日电）

郎平評球

本报记者 李长云

資料1 98/11/10「人民日報」

が、挫折を味わうことでチームは進歩していくものである。

ブルガリア戦前、郎平監督は選手たちに、リラックスして全力で試合に臨み、自分たちのバレーで相手を制しよう、と話した。このように負けの許されない重要な試合は、選手たちにとって絶好の鍛錬の機会である。

準決勝をひかえ、郎平監督はさらに次のような考えを話した。ロシア、キューバ、ブラジルはネット上の力（网上的实力）では中国に勝るが、中国にもチャンスはある。勝負の鍵は、本番の試合でどこまで自分たちのプレーを十分発揮できるか、ということにかかっている（臨場の发挥）。またもう1つのポイントは、選手たちの心理的な要素である。強豪を相手に、精神的にも技術的にも大きなプレッシャーを受ける中、臨機応変に対応する力（臨場的承受能力、应变能力）を見せることができるか、いかに長所を発揮し短所をカバーし（怎样扬长避短）、相手にプレッシャーを与えることができるか。選手には結果のみにこだわらず、相手を制するあらゆる方法を考え、相手にプレッシャーを与え、そこからチャンスをつかみ、質の高いバレーを展開してほしい。

チームの実力では劣るが勝機は十分あり、として臨んだ準決勝で、中国はストレートでロシアを下し決勝に進む。「人民日報」は、「ハイレベルのバレーを展開（打出了高水平）」と題し、ロシア戦の勝因をブロック、サーブプレッシャー、速攻の3点に絞り、やはり具体的な数字を挙げて分析して

いる(98/11/12)。また同日の『北京晩報』は郎平監督のコメントを載せ、ロシア戦の勝利は、相手の戦術戦法をスカウティングしたこと、1度は絶望的であった準決勝進出なのだから、とプレッシャーを捨てたこと、スター選手を欠く中国チームは全選手の団結で戦ったこと、の3点によるとした。またキューバとの決勝に向けては、実力での劣勢を十分認識した上で、何とか相手を切り崩すための戦術について様々に取り上げられていた。

中国は結局キューバにストレートで敗れ、準優勝に終わる。13日の報道では女子大会を振り返り総括する記事が載せられた。まず『人民日報』は、キューバ強しという世界の形勢が依然として変わっていないこと、現在の世界のバレーボールは速攻のアジア、高さとパワーのヨーロッパ、恵まれた身長から多彩な強打とバックアタックを繰り広げる南米の3つのタイプに集約されること、中国にとって今大会の収穫は新人の活躍であり、今後は総合力でキューバを上回り再び世界チャンピオンを目指すべきこと、を挙げた。一方、『北京晩報』は、「より高く、より速く、より強く(更高、更快、更强)」と題し、この3点をトータルしていくのが現在のバレーボールの流れであるとし、また、かつての郎平選手のような決定力のある新しいエースを育成することの必要性を指摘している。

厳しい戦いを今後の糧に～中国男子チーム～

ベスト8を目標とする中国男子は予選ラウンドの初戦、ウクライナに3対1で勝利を収めた。『北京晩報』では、「険しい道のり、勝機を狙え(歩歩險惡、爭取勝机)」と題して中国男子の今大会での展望を載せた。その記事では、アジアの速攻型バレーの代表である中国男子の今後の厳しい戦いを予想し、目標のベスト8は厳しい、ベスト12以内で良い順位を狙うのが現実的、と報じた(98/11/14)。

続いて中国男子はチェコを下し2次ラウンド進出、ベスト16入りを決める。『北京晩報』は「恐怖観念に勝つ(战胜了恐惧心理)」と題し、世界選手権の本番でヨーロッパのチームに連勝したことで汪嘉偉監督⁶⁾と選手たちにも自信が生じたと伝えている(98/11/15)。

予選ラウンド最終戦、中国はアトランタ五輪優勝、今大会も優勝候補のオランダに1対3で敗れるが、『北京晩報』では、「健闘する中国(中国队有的打)」と題して、あわや予選落ちもあるかと思われた男子の健闘を讃えた。その記事の中では、「速さを以て高さを制する(以快制高)」中国のバレーでヨーロッパの強豪2チームを下したことを評価する一方、中国チームの体力不足を指摘している。以後劣勢を強いられる中国男子チームに対し、この体力の問題はしばしば言及されることになる(98/11/16)。

2次ラウンドの初戦、中国は新進気鋭のユーゴスラビアにストレートで敗れる。『人民日報』は「勝負にはやはり実力が必要(贏球最終要靠實力)」と題する記事を載せ、スパ

イク、ブロック、サーブでの得点やミスによる失点を具体的な数字を挙げて両チームを比較、中国のミスの多さが重大な敗因とし、また、ユーゴスラビアが技術、経験、スター選手の存在、キーポイントでの得点などの面にわたって中国より勝っていたとの汪嘉偉監督の言葉を載せ、世界のトップレベルチームとの差はあるが、しっかりと総括を行い、それを活かして後のゲームに挑戦していく、との決意を伝えている(98/11/19)。

中国は続くロシア戦も1対3で惜敗する。特に1対1で迎えた第3セット、16対16という大事な場面で審判がロシアのホールディングをとらず、中国はそのセットを落とし、結局試合に敗れてしまったということで、報道はその点について詳細に触れている。しかし例えば『人民日報』の「失敗の経験に学ぶ(吃一堇、長一智)」という記事では、その判定を不公平だとしながらも、両チームの実力差を考えれば仕方ない結果だとしている。続いてその記事では中国の敗因として、守りすぎ、攻撃の単調さ、セッターの経験不足などを具体的に指摘し、今後はこの経験を活かしチャンスをつかめ、と結んでいる(98/11/20)。

中国はその後イタリア、オランダに連敗し、ベスト8進出の目標は達成されなかった。

そして2次ラウンド後半を前にした移動日、『人民日報』には「難しい選択(兩難的的选择)」という注目される記事が載った。それは、世界選手権で強豪を相手に消耗するよりは、12月に行われるアジア大会に照準を合わせた方が良いのでは、というものである。中国と世界のトップチームとの力の差は歴然としている、残りの3試合の成績いかんで9～12位決定戦に残ることはできるが、そうするとアジア大会への準備が困難となる、まずアジアで足固めをし、その後世界へ向かうのが賢い選択ではないか、というのである。そしてそこには、2次ラウンドのグループ分けが開催国である日本に有利に施されており、突出して強いのはブラジルとキューバのみ、一方中国が属しているグループはイタリア、オランダ、ユーゴスラビア、ロシアといった強豪がひしめき合っている、という背景がある。日本の報道では正面切って伝えられることはなかった指摘であるが、中国メディアは批判を添えることなく淡々と以上のような件にも言及しているのである。

中国は2次ラウンド後半戦、ギリシャに1対3で敗れる。25日付『人民日報』は、大会前からの連戦で中国チームの体力の衰えが甚だしい、と調整の仕方に疑問を投げかけている。また、同日『北京晩報』では、祝嘉銘氏⁷⁾のコラムを載せ、世界の男子バレーボールはオランダ、キューバに代表される、高さでネットを支配する「実力派」から、ブラジル、ユーゴスラビア、イタリアに代表される、身長は多少低くともオールラウンドなプレーでジャンプ力に優れた「技術派」のバレーへと移行している、従って今後は高さのみを追求するのではいけない、との指摘を伝えている。

中国はその後ウクライナを3対1で下すものの、アメリ

カにはストレートで敗れ、ベスト12にも洩れ、直ちに帰国の途に着く。結局中国男子は世界選手権閉幕前に帰国し、アジア大会に向け体力を回復させ、調整を行い、結果的にアジア大会では世界選手権の反省を生かし優勝を遂げるのである。

中国バレーボールの今後の展望

世界選手権を終え、「北京晩報」では、男女それぞれのバレーボールの今後の展望について、特約評論員李安格氏の論評を載せている。まず女子については、「中国女子バレーボールの希望はどこに（中国女排希望何在）」と題する以下の記事が載った。

（資料2 98/11/13「北京晩報」・要約）

中国女子バレーはソウル五輪以来、10年間世界王座から遠ざかっている。郎平が監督に就任し、女子バレーが再びレベルアップしてきたのは事実である。しかし人々は中国女子バレーの往年の英姿の再現を待ち望んでいる。

順位とレベルは不相応：今大会での準優勝はもちろん喜ぶべきことであるが、それはラッキーな結果であり、実力不相応のものであることは誰の目にも明らかである。それでは、中国女子バレーの希望は一体どこにあるのであろうか？

チャンス到来：国際バレーボール連盟の決定によると、1999年から、国際ルールは1セット25点のラリーポイ

ント制に変更される。これは我々にとってまたとないチャンスである。現在世界の女子バレーの強豪チームは、強打を主とするタイプと速攻を主とするタイプの2つに大きく分けられる。キューバ、ロシア、クロアチア、イタリアなどは前者であり、ブラジル、中国、韓国、日本は後者に属する。現行のルールでは、速攻を主とするチームには不利な面があった。というのも、速攻はサーブプレシジョンからの攻撃において組み立てやすく、たとえ速攻が成功してもサーブ権を得るだけで得点にはならなかったからである。従って、強打が重要な得点手段となっていたのである。新ルールになれば、速攻を得意とするチームに有利となろう。

速攻の3つの手段：新ルールが生み出す新しいバレーボールを見据え、どのチームも速攻を磨いていこうとしている。そこには3つの方向性が見える。

1つ目は欧米の大型チームが目指す高さを活かした速攻である。2つ目はより早い速攻である。小さなアジアのチームが高さを追求することは難しいが、持ち味の敏捷性をフルに活かせば、速攻のリズムをより早めることができる。3つ目は早さと変化の結合である。速攻本来のおとりの働きを利用して各種の戦術とコンビの変化を生み出すことができる。ロシア戦では中国の戦術の変化が相手の高いブロックをも崩したが、キューバ戦では我々の特長である速攻が十分発揮できなかつたため敗れたのである。

新ルールの施行によって強打を中心としていたチーム

中国女排希望何在

中国女排自兵败汉城，冠军已丢了10年之久。郎平回国执教是个义举，值得敬佩。女排水平有所提高也是事实。可是大家更关心的是女排的拼搏精神何时再能重现。

名次与水平不相称

这次能获得亚军，当然值得庆幸。但是连不懂球的都知道其中有幸运的因素，实际的水平与亚军的称号并不相称。那么，女排到底希望何在？

出现机遇

国际排联已公布自明年1月1日起，国际规则改为每局25分的每球得分制。决胜的第五局为15分。这对我们是一次难得的机遇。当前世界女排各强队的打法，可以分为两种流派。一是以强攻为主的高快结合；二是以快攻为主的快高结合。古、俄、克、意等属于前一种；已、中、韩、日属于后一种。现行的规则要换发球，对以快为主的流派打法有不利的一面。因为快攻多在接发球的情况下容易组成，即

使快攻成功也只得发球权而不得分。因此强攻就成为比赛中得分的主要手段。如果改为每球得分，对具有快攻特点的队相对更为有利。

快攻三手段

新规则出现的这种新规律，各队都明白，都会在快攻上求得发展。快攻的发展可以体现在三个方面：

一是高点快攻。欧、美高个队会更多地利用空间高度打各种快攻。二是加速快攻。亚洲矮队的快攻难以利用空间高度，倒可以利用自己灵活快速的特点去争取时间上的优势，提高快攻的节奏。三是快变结合。利用快攻本身的掩护作用发展多种战术配合的变化。这次胜俄罗斯队，我们的战术变化就起了破坏对方高大拦网的作用。对古巴决赛打得不理想，重要一点就是快攻特点没有发挥。

新规则将逼那些以强攻为特点的队走一条她们并不熟悉的道路，而我们在熟悉的路上前进要比她们得力得多。这正是我们女排重振雄风、夺回世界冠军的一次极好机会。

本报特约评论员 李安格

は、これまでとは違うバレーを目指すことになる。しかし我々にとって慣れた道(速攻主体のバレー)を進むのは、他チームよりも有利であろう。これぞ中国女子バレーが復活し、再び世界チャンピオンの座を奪回する絶好の機会である。

また男子についても、中国チームが全日程を終了後、同じく李安格氏による「自分自身を知れ、落胆するな—中国男子バレーボールを論ず—(认清自己, 不要泄气—評中国男排—)」というコラムを載せている。

(98/11/27『北京晩報』・要約)

中国男子は今大会7勝3敗の成績で、ベスト12入りも達成できなかった。

身体：中国チームの平均身長は強豪チームには明らかに及ばないが、それはあまり大きな問題ではない。ロシアやオランダは大型チームであるが、いずれも身長で下回るイタリアやユーゴスラビアに敗れた。しかし中国は身長以外にもサーブやスパイクの力、また体力面など身体資質での差が大きい。予選ラウンドはともかく、2次ラウンドの7試合においては体力不足が顕著にみられたが、体力と身長は関係ない。大切なのは練習による鍛錬と、科学的根拠に基づき管理することである。

心理：中国は試合中の波が激しく、大きくリードを奪っていても逆転されてしまうことがしばしばあった。精神力の鍵は、自己コントロールができるかどうかということである。その基礎になるのは選手個々人の教養、素養である。選手を育てる上では、技術ばかりでなく教養も重視せねばならない。

技術：バレーボールは、個々の技術が全て得点にも失点にもつながるので、技術はオールラウンドにマスターすることが求められる。中国のサーブや、ましてや強打は大型チームには通用しない。速攻は本来我々が得意とするところであったが、相手の強いサーブや攻撃のためなかなか有効に実力が発揮できていない。またその速攻にしても、他チームと比べ特に優れているわけでもない。80年代初め、汪嘉偉監督自身が現役時代に見せた移動攻撃は強豪チームにとって脅威であった。中国がもし速攻本来の攪乱効果を多用していくならば、今以上にブロックを崩すことができるのではないだろうか。その他、中国のブロックやレシーブは好不調の波があり、基本技術が安定していない。

戦術：身体条件が欧米の強豪チームに及ばないのであれば、我々は6人の総合力で対抗すべきである。今大会を見ると、イタリアなど一部のチームが、前衛の速攻をおとりとし、後衛プレーヤーが低めのトスを切り込んでバックアタックするという効果的な戦術を採っていたが、バレーのチーム戦術というものは、ハイレベルの芸術としてさらに考案、発揮されるべきものである。今後は新ルールが適用され、ラリーポイント制での25点ゲー

ムとなる。これによってサーブレシーブからの攻撃の際、チームとしての戦術を展開して得点をあげられることになる。中国男子がこのチャンスをつかみ、本来の持ち味である速攻を武器に戦っていけば、今後の望みも明るいであろう。

中国バレーボールの動向

以上、中国活字メディアにおける世界選手権期間中の報道を眺めてきたわけであるが、これまで取り上げてきた、試合の結果や予想を詳細に分析し伝える記事とともに、今後バレーボールというスポーツがどうあるべきか、いかに変化すべきか、という視点に立った記事の存在も注目すべきものと思われる。1つには、先に見た記事の中にもあったように、1999年1月から採用される新ルールを中国などアジアのチームにとってチャンスと捉え、これを機に世界の頂点を再び目指そうという上向きの気運である。中国においても最近では世界チャンピオンの座を離れ、サッカーやバスケットボールなどに人気を奪われがちなバレーボールであるが、衰退の傾向を嘆くのみでなく、さまざまな策を講じて実力と人気の回復に努めようという精力的な姿勢が感じられる。

また11月17日付『人民日報』に掲載された「バレーボール連盟は経営に苦心 発展はアンバランス—1998年世界選手権随想—(排連苦心经营, 发展仍不平衡—1998世界排球锦标赛随感—)」と題する記事は、バレーボール界の現状について、非難すべきは非難しつつ、しかし将来を見据えてバレーボールの発展の道を探る建設的な論調によるものである。

そこではまず、今回の世界選手権での観客動員が日本の試合を除いて少なく、主催者の期待外れであったことを指摘。また、国際バレーボール連盟は今大会を成功させるために100万ドルの賞金を用意し、110を超えるチームの予選参加を集め、また男女大会を同時に開催し、TV中継を行うなど、アコスタ会長自身「史上最大規模の歴史的な大会」と位置づけた大会であったが、バレーボール連盟の幹部たちは表面上の言葉のみに終始するのではなく、バレーボールの発展がバランスを欠いていることも見逃してはならないと警告する。つまり、バレーボールはサッカーや陸上の組織、あるいは五輪委員会よりも参加国の多いメジャースポーツであるにも関わらず、アフリカなどではまだまだ普及しておらず、レベルも低い、という問題があるということである。さらに、バレーボールは高い集団性とテクニックを必要とするスポーツであるから、バレーボールが生き残り、発展していくにはクラブチームとしてプロ化していくことが必須条件であると述べている。具体例としてアメリカ、日本、中国におけるバレーボールのプロ化が、サッカーやバスケットなどに比して立ち後れていること、反面、プロ化に成功したイタリアでは男女ともナショ

ナルチームの力が上がっていることを挙げ、レベルアップのためのプロ化の効用を訴え、それを成功させるには自らの努力と、国際バレーボール連盟の変革が必要であると続ける。そして最後に、バレーボール連盟に対し、目の前の出来事に一喜一憂するのではなく、長い将来を見通して万事に処していくべきと進言している。

中国では男女16チームによって構成される全国リーグ中、昨年は上海と四川の各男女チームのみがプロチームであったのが、1999年のリーグからは新たに浙江、遼寧、南京、天津、成都の各チームもプロチームとして参加することである。中国のリーグ戦はホームアンドアウェイ方式で行われ、1999年1月からの新ルールを早速取り入れるなど、人気回復とバレーボールの発展に向けて具体的な方策が実際にいくつも試みられている。

また、世界選手権前の中国女子とイタリアとの対抗試合では、天津津達制衣有限会社がスポンサーとして協賛し(98/10/21『人民日報』)、また、中国男子には紅都という服飾メーカーが1998年から2000年まで国際大会遠征用のスーツを無料で提供するそうである(98/10/25『北京晩報』)。さらにアジア大会では南京の電子メーカーである熊猫グループが中国男子の応援団を結成し、現地で盛んに応援を繰り広げた(98/12/31『人民日報』)。

バレーボールを取り巻く現状の厳しさは事実であるが、ただ手をこまねいているのみでなく、具体的な行動を起こし活路を開こうという、中国バレーボール界の意気込みは、報道からも、実際の運営状況からも見て取れるのである。

結 語

中国におけるスポーツは、かつての国家丸抱えの状態から、近年の社会、経済の急速な変化の影響を受け様変わりしようとしている。

しかし一方、世界選手権に向けて日本へ旅立つ中国女子チームがそろって北京の天安門広場での国旗掲揚式に参加してくるなど、スポーツと国威発揚的な要素の関係もまだ残ってはいる(98/10/26『人民日報』)。

また、1998年末の中国は改革開放20周年を記念する行事や報道が盛んに行われたが、その中で『北京晩報』には、「『団結起来 振興中華』誕生記」という記事が載った。それは1981年3月、ワールドカップ予選決勝で中国が韓国をフルセットで下した試合を振り返るもので、当時学生たちの間でこの試合を機に「団結起来 振興中華」のスローガンがわき起こり、それ以来中国のスポーツ界に「アジアを突破し世界へ踏み出す」という目標ができたのである、と

伝えている(98/10/10)。バレーボールが国家の1つの柱、支えとして存在したことを改めて取り上げる記事が、この世界選手権を前に掲載されることには、スポーツを国家の1事業として認める大きな意義があるように思われる。

また、中国女子が世界選手権準決勝でロシアを破った翌日(11/12)の『人民日報』には、「塞翁が馬(塞翁失馬, 焉知非福)」と題する記事が載った。それは予選ラウンドで韓国に敗れ苦戦を強いられた中国が、それを経験として良い結果を出したのに対し、ロシアはそれまでの楽勝試合が悪い結果につながったとして、故事成語を用いて教訓、人生論を説こうという記事である。そこでは、挫折や困難は悪いことではなく価値あるものである、人生順調なときにこそ自分自身をしっかりと見極めていないと、その裏に潜む落とし穴に気付かず、状況が悪化したときには手遅れ、ということもある、経験から教訓を汲み取っていくことはバレーボールのみでなく人生の哲理でもある、と説く。

急激に発展する社会生活の中にありつつも、スポーツに「感動」し、そこからの教訓を真摯に受け止める国民性は、バレーボールを含め、さまざまなスポーツを今後もより発展させていくであろうことを予感させる。また中国メディアが伝えるバレーボール報道は、ただ勝利を喜び敗北を嘆くのではなく、具体的かつ専門的な分析から現実的意見を率直に述べると共に、バレーボール界とそれを支える一般大衆のバレーボールへの関心をも育てうるものと言えよう。隣国で同じスポーツに携わる者として、今後も中国のバレーボール界に一層注目すべきではないだろうか。そこには学ぶものがきっと多いはずである。

注

- 1) 第13回バレーボール女子世界選手権大会は1998年11月3日～12日、7都市にて開催。第14回バレーボール男子世界選手権大会は1998年11月13日～29日、11都市にて開催。なお本大会は日本において男女同一国開催。
- 2) 第13回アジア競技大会はタイ・バンコクにて1998年12月7日～15日に開催。
- 3) 元中国女子ナショナルチーム監督。
- 4) 元中国女子ナショナルチームメンバー。郎平現監督と共に5冠を達成。
- 5) 元中国男子ナショナルチームメンバー。中国女子ナショナルチーム監督時代に郎平を擁し5冠の偉業を達成。現在アジアバレーボール連盟会長。98アジア大会団長。中国のスポーツ界における重鎮として活躍中。
- 6) 元中国男子ナショナルチームメンバー。かつて日本の東レでプレーイングマネージャーなどで活躍した。現中国男子ナショナルチーム監督。
- 7) 国際バレーボール連盟技術代表。上海体育委員会副主任。